

胆石症を合併した維持血液透析患者に対する食事指導の検討
-食事の欠食ならびに昼食時間の遅延が胆石発症に及ぼす影響-

医療法人社団昇陽会 阿佐谷すずき診療所

○松本ゆかり（マツモト ユカリ）、井出裕美、成海八重子、鈴木恵子、鈴木利昭、島内千登里、新井浩之、鈴木太、鈴木敦

【目的】

胆石症の主な要因として食事が関連していることは周知の事実である。ところで透析患者に胆石症を合併する頻度が健常人と比べて高いことは報告されている。高齢ならびに、原疾患として糖尿病を持つ透析患者が増加する中で、胆石症を合併した患者に対する食事指導については確立されていないのが現状である。今回当院での胆石症を合併した患者の実態調査を行い、さらに食事状況に関するアンケートをとり食事指導の役割について検討した。

【対象患者】

2018年10月末の時点で、当院外来に通院している血液透析患者132名のうち、年齢80歳以下かつ透析歴5年以上の患者69名

【調査項目】

年齢、性別、原疾患（糖尿病の有無を含む）、身体計測：身長、ドライウエイト（DW）、BMI、胆石症の有無、食事状況についてのアンケート

【患者背景】

患者数：69名、性別：男41名（59.42%）、女28名（40.58%）、

年齢：62.86 ± 11.55歳（36～80）、透析歴：15.62 ± 9.36年（5～44）、

糖尿病の有無：有21名（30.44%）、無48名（69.57%）

身体計測：身長161.49 ± 8.99 cm（138～176）、DW 55.84 ± 12.89 kg（24.2～88.0）

BMI 21.21 ± 3.87（12.7～33.9）、胆石症の有無：有17名（24.64%）、無52名（75.37%）

【胆石症を合併した患者の背景】

患者数：17名、性別：男10名、女7名、年齢：66.35 ± 2.78歳、

糖尿病の有無：有5名/無12名、透析歴：17.65 ± 2.27年、BMI：22.47 ± 0.93、

透析時間帯：午前10名/準夜7名、

胆石症と診断された年齢：男62.9 ± 13.2歳、女42.3 ± 9.9歳 (P=0.019)

胆石症の診断時期：透析開始前4名、透析開始後13名 (76.5%)

胆石症と診断された時期 (透析開始後)：11.77 ± 9.31年 [2年、32年] (n=13)

【結果】

1、性別、年齢、糖尿病の有無、透析歴、BMI、透析時間帯について

胆石症の有る群 (胆石群) と無い群 (非胆石群) との2群間での比較を対象とし検討したところ、胆石群の方が高齢、BMI高値の傾向は見られたが有意差は認められなかった。午前透析と準夜透析の2群に分けて同様の検討を行うと、午前透析ではいずれの項目にも有意差は認められず、準夜透析では胆石群の方が有意にBMI高値であるという結果になった。

2、欠食率について

胆石群では欠食5名、欠食なし12名で欠食率29.41%であったが、非胆石群では欠食5名、欠食なし42名で欠食率10.64%と、胆石群で欠食が多い傾向が見られた。昼食を抜く頻度を透析日と非透析日に分け胆石群と非胆石群との2群間で比較したところ、非透析日で両群間に有意差が認められ胆石群の方が非胆石群と比べて高い結果となった。朝食・夕食を抜く頻度は両群間に有意差は認められなかった。

3、胆石の有無と空腹時間 (前回の食事から今回の食事までの経過時間) について

朝食、夕食の空腹時間は透析日、非透析日のいずれも胆石群、非胆石群の有意差は認められなかった。昼食の空腹時間は透析日ならびに非透析日ともに胆石群の方が有意に長い結果となった。透析日の昼食の全症例の空腹時間を箱ひげグラフを用いて比較すると、胆石群では、4例が中央値からはるか高値であり、2例が15時間前後、残り2例が20時間前後であった (図1)。非胆石群でも1例が17時間であり、同様の現象が認められた。

【考察】

透析日・非透析日に関わらず欠食をせず食事間隔を長く空けないことが胆石症発症予防には重要であると示唆された。

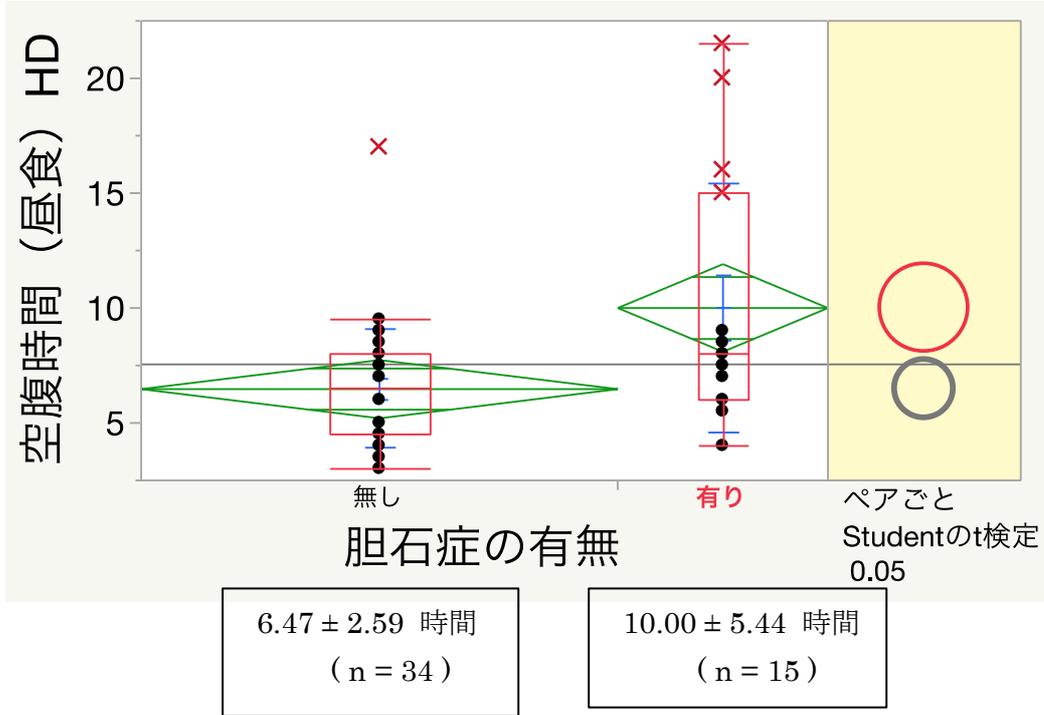


図 1 胆石症の有無と空腹時間 (昼食:透析日)